

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 89

2023年11月

Special to the Newsletter

気候崩壊とAIの時代に

木村 武史

天理大学アメリカス学会会長の山田政信先生より、『アメリカス学会ニューズレター』に寄稿するエッセイのお誘いを受けた。その際、かつて筆者が書いた「人新世（アントロポセン）の時代における技術と宗教」（『現代宗教』2019年）に沿ったような内容で構わないので、と言われたため、一つ返事で気楽に受けてしまった。しかし、『アメリカス研究』の所収論文のタイトルを拝見すると、少し場違いな内容になるのではないかと危惧しつつ、他に書く内容を思いつかないので、皆様には申し訳ないですが、少々お付き合いいただければと思う。エッセイであるので、研究ではなく、あくまで現在の世界の動向について思っていることを書きたいと思う。

前世紀の終わりには、21世紀は環境の世紀になると言われていた。そして、21世紀ももうすぐ四半世紀になろうとしている現在、今世紀は気候危機と人新世の時代であることが明らかになった。気候変動と環境問題の評価については様々な意見があるが、国内のメディアがカバーし切れていない深刻な状況が進行中であるようにも思われる。最近、レジリアンスがテーマになってはいるが、ティッピング・ポイントが越え（たとも思われ）、ネガティブ・フィードバックのサイクルが加速度的に進みそうな気配が感じられる中、レジリアンスで対応は十分なのであるかという心配がある。また、若い世代で「気候うつ」とも呼ばれる心理的症状が見られるようになるなど、世代間倫理の問題も新しい様相を呈してきているようである。

このような状況は、宗教学を教えながら、21世紀の初めにサステナビリティ問題にも興味を持ち始めた筆者には想定していなかった状況である。かつて若い世代に近かった時には、若い世代が生まれる前の1987年に出版された『我ら共有の未来』で、既に当時科学者たちが環境問題の影響は21世紀には目に見える形で見られるようになることを指摘しているのを知ることができた。しかしながら、現在の大学生から見れば、かなり上の世代に属すると見られる筆者などは、今度は若い世代から不作為の道徳的責任を問われる世代に属し始めるようになってきている点は、気候危機と人新世の問題を論ずる際には、認識しておくべき課題であろう。

さて、このエッセイでは、かつて筆者が書いた「人新世（アントロポセン）の時代における

技術と宗教」で取り上げた問題関心を前提に、更に加速度的に進行する気候危機の問題、AIを初めとして人間を技術的に改変しようとする技術革新が持つ意味合いが、相互に絡み合っていく未来が持つ意義について、若干、思うところを書いてみることにしたい。

このエッセイを書いている10月にはもう涼しくなり、今年の夏の暑さを忘れてしまいそうであるが、2023年6月から8月は世界的に史上最も暑い夏だったことは記憶に新しい。今年の夏の暑さについて、国連事務総長アントニオ・グテレスが気候崩壊という言葉を使ったのは、気候危機の問題が新しいステージに突入した可能性を示唆している。ジャレド・ダイヤモンドが『文明崩壊』という著作を書いたのは2005年のことである。その時からほぼ20年経った2023年に、気候崩壊が感じられ、語られるようになってきたのは、何らかの文明崩壊が起きつつあることを示しているのであろうか。気候崩壊の進行は緩慢であるかもしれないが、その影響は不可逆的であり、かなり甚大な影響を及ぼすと思われる。気候崩壊が過去の人為的活動の影響によって生じてきたのだとしても、これから行動に移す人為的活動では、気候の状況を元に戻すことはかなり難しいと考えられる。例えば、海洋の温度が上昇し、酸性化が深刻化し、海の生物多様性が極度に低下した場合、海洋の状態を回復する技術を考え出すことができるのであろうか？史上最も暑い夏が毎年更新され、しかも期間が長くなるようになる場合、大量の電気を必要とするクーラー稼働するだけでは、問題の解決にはならないことは言うまでもないであろう。

気候危機の問題が論じられる時に、環境正義の問題も論じられてきており、しばしば南北問題との関連で論じられることもあった。アメリカでは、黒人などの貧困層の住む地域の方が悪化する環境の影響を受けやすいという問題も指摘されてきていた。では、気候崩壊はいかなる環境正義と不正義の問題を引き起こすのであろうか。夏にスペイン、ギリシア、カナダなどで山火事が起きたことは記憶に新しいが、豪雨と洪水の被害がヨーロッパを含めて世界各地で起きている。中国でも異常高温と豪雨による洪水被害が起きている。中国では首都北京を守るために洪水の被害を被った地区があったことなども報道されている。気候崩壊は、環境問題の議論の次元とは異なり、先進国地域にも被害をもたらすようになってきていることは明らかである。

さて、2023年は同時に、OpenAIのChatGPTが世間を騒がせた年でもあった。ChatGPTは生成AIの一部であるが、様々な領域でその影響力をいかに有効に活用できるかが模索されている。だが、人々が生成AIを利用することが何を意味するのかについて考えてみると、自然環境から切り離された技術文明社会の中で技術開発が進展し、人間社会の機能の向上における機械の役割が更に重要性を増し、人間の知能が更に機械化され、人間が機械に依存して生存していくようになって感じられる。そして、環境問題の展開の中で人間中心主義を非中心化する視線が広がっているが、同時に、AI・機械の技術発展に関連してポスト・ヒューマンイズムの視線が論じられている。それらは出発点も目指す終着点も異なるが、どちらも人間の位置を周辺化し、人間が中心とはならない世界が問題の解決であるかのような構想を企てている。

一見すると、両者は関りがなくかのように思われるが、従来の技術開発が自然環境を改変し、人間社会の向上のために自然を資源として使うように仕向けられ、それが気候変動・気候崩壊

を引き起こしてきたといえるのに対して、AIの技術開発は人間の知能を改変し、単に人間のエンハンスに資するように人間と技術の関係を変えるだけでなく、人間が機械であるAIの能力を引き出すように利用の仕方を学ばなくてはならない状況が生まれつつある。

自然環境を開発する技術によって、人間が自然より優れた位置を確立することができるようになったのに対して、人間の知能を真似して作り出されたAIが、既に人間の能力を凌駕しつつある状況は、場合によっては機械であるAIと人間との関係が、想定されたものと異なる可能性へと変わってくるのかもしれない。OpenAIのアルトマンはAIは人間を労働から解放すると述べているようだが、おそらくそれは一部の人間にしか当てはまらないのではないだろうか。

さて、気候崩壊とAIの時代の相互関連について、もう少し書いてみたい。気候崩壊には、気候変動だけではなく、他の様々な環境問題が関連している。人新世の問題は、人間活動が地質学的な痕跡を残すほどにまで影響力が増大しているという点にある。だが、地質学的な痕跡は残らないかもしれないが、自然環境に破壊的な影響を及ぼすと思われる人為活動、経済活動は多々ある。環境汚染はその一つであろう。環境汚染というと人間は関わりがないかと思ってしまうが、そんなことはない。自然の一部としての人間の身体にも十分汚染の影響はあると考えられる。ポスト・コロニアル研究の観点からアメリカ史について研究を行うこともできる。だが、アメリカ合衆国のコロニアルな政策は過去の話ではなく、現在進行形であり、日本にも影響を与えている点については、目を向けておいても良いかもしれない。

後者のAI技術開発の主要な担い手がアメリカにあるIT企業大手であることは言うまでもない。西垣通がAI開発の背後には一神教的な世界観が潜んでいると論じている点が正しければ、アメリカ文化と技術開発推進の背後にある人間観・宗教観などが問題となるであろう。そして、日本国内の生成AIの利用、話題はアメリカの企業が開発したものがほとんどである。筆者もChatGPTや生成AIを使うことがあるが、それらを利用する際に感じることは、何か独特の世界観があることである。このようなAIが社会と人間のあり方を変容することが予想される中、心や意識も変えられていく懸念がある。

ここまで書いたことをまとめれば、既に地球環境は大きく変えられ、身体も自然の状態から切り離され、変えられつつあり、更に心も大きく変えられようとしている。その先にあるものは何であろうか？これから生まれてくる世代が生きる地球環境は、1960年代生まれの筆者が経験してきた自然環境とは大きく異なるし、社会・技術環境も大きく異なっている。テイヤール・ド・シャルダンの意味とは異なるが、地球全体に人間の理知のネットワークが広がるノウアスフィアが、気候危機の解決を示し、進化の次の段階への移行を示してくれるのか、あるいは気候崩壊は技術文明の崩壊への序章となるのか。

人文系研究者である筆者の研究は未来について考えることではないし、歴史の流れに何らかの影響も与えることもできない。ただ、多くの人文系研究者と同様に、研究という枠組みを離れて、考えていることをこのような形で公表させていただけるのは大変有難いことだと、感謝の辞を述べて、この駄文のエッセイを終わらせていただきたい。

(きむら・たけし／筑波大学人文社会系教授)

The Star-Spangled Banner (星条旗) イギリス人がアメリカに建てた初期の植民地、つまりジェームズタウン軍旗やプリマスに翻っていた旗は、白地に聖ジョージの赤い十字が描かれている正四角形の英国連邦旗であった。しかし、英国教会の中のカトリック遺物の一掃を目指して大西洋を渡ってきたニューイングランドの清教徒はこの旗に甚だ不満であった。彼らにはこの旗は、ローマ法王がイギリスに残した偶像崇拜の遺物に映ったのだ。そんなわけで、1700年頃からニューイングランドでは植民地別にいろいろな旗が生まれた。例えばサウスカロライナの旗はガラガラ蛇が描かれ、その下に「俺を踏むなよ」と書かれていた。1776年ワシントンが率いる植民地軍がボストン近くの丘に掲げた旗は陸軍と海軍の掲げた「グランド・ユニオン旗」と呼ばれた。これは13本の赤と白の縞地の右上隅にイギリスを表す聖ジョージの赤十字とスコットランドの聖アンドリューの白十字を組み合わせたものであった。英国旗と似た軍旗を掲げてアメリカ人が1年半の間イギリス人と戦ったのは、この時期のアメリカは公的にはまだイギリス人との結びつきを失っていなかったからだ。もっとも、植民地軍の中には英国人の軍旗の下に集まることをよしとしない人もいた。19世紀の作家ホーソンが短編『エンディコットと赤十字』で描いてみせたセーレム隊長エンディコットはそのような人物だ。以下はその一節だ。「エンディコットは剣を振り回して旗に突き刺し、それから左手で赤十字を軍旗から引き裂いた。」

1776年7月4日、アメリカ人は英国から独立すると、独自の国旗を望むようになった。翌年の6月14日、フィラデルフィアで開かれた第2回大陸会議は国旗のデザインを次のように決議した。「合衆国国旗は赤と白の縞を交互に13本、青の布地に13の星を配したものにする」。この新しい旗をデザインしたのはフィラデルフィアのアーチ通り70に住む室内装飾師キャンビー・ロスだと言われている。1873年3月14日彼女の孫がペンシルベニア歴史協会で、「1776年6月店にきたジョージ・ワシントンから新しい国旗のデザインを考えるよう特命を受けた」という祖母の話を持ちどころにした論文を発表したからだ。しかし、1776年6月という時のワシントンは、ニュージャージーで英国軍と戦っていた最中で、そんな余裕はなかったはずだ。また大陸会議にもそんな記録はない。おそらく彼女は国旗制作に関わった何人かの一人であったのだろう。

大陸会議は星の配列に規定を設けなかったので、いろいろな星の配置ができたが、画家F・ホプキンスがデザインした13の星を円形にした旗が1782年頃から人気を得た。当初 Stars and Stripes という名で親しまれていた国旗は、1806年から the Star Spangled Banner と呼ばれるようになった。この名づけ親はボルティモアのフランシス・スコット・キーという36歳の弁護士だった。1812年の第二次米英戦争中の9月13日、彼は友人と共にマディソン大統領の使いとして小舟で英国艦に向かった。英国艦にはボルティモアの著名な医師が捕らわれてお

り、2人は彼の釈放を求める大統領の親書を持っていた。彼らが英国艦に到着したとき、ボルティモア湾に臨むマクヘンリー砦の攻撃が始まり、2人は船で砲撃戦を目撃する羽目になった。そして夜が明けそめ、まだ砦に米国旗が翻っているのを見た彼は、その感動を持っていた封筒に書き留めた。それが“*Oh, say can you see, by the dawn's early light,*”で始まるアメリカ国歌の歌詞である。この詩が9月20日の地方紙に発表されると、町中に大きな反響を起こした。キーの詩の中の星条旗という言葉はいつしかアメリカ国歌の代名詞として広がった。しかしこれが正式にアメリカ国歌となったのは、キーが詩を書いてから117年たった、1931年3月3日である。

Seaside Resort (海水浴場) 植民地アメリカでは beach という言葉はハドソン川の東岸とニュージャージー州沖合の砂地の島を指した。この頃の上流階層や富裕層には美しい水場へ旅行する人々がかかりいた。その理由はそこに満ちている空気が、難聴だけでなく、潰瘍やぜんそくや結核の治療に効果があったからだ。当初の海岸は今日の娯楽（水浴び）の場というよりは、広範囲の病気の治療の場だったのだ。換言すれば、海での水浴は成人向けであって、海辺と子供とのつながりはほとんどなかった。海辺が海水遊泳場になるには18世紀後半まで待たなければならなかった。1790年から1850年までの間に swimming、swim という語が広まった。イギリス産の bathing machine（水浴機械）がロングアイランドの海岸に見られるようになるのは1794年の頃。これは馬が引っ張る簡易更衣室のことで、海水泳客はこの二輪乗り物に乗り込み、御者が低い波のところまで移動更衣室を運ぶ間に着替えるのだ。1810年にはニュージャージー州東部のジャージー市の海岸はリゾートビーチと呼ばれるようになった。ニューヨークの上流階級を引き寄せた海浜リゾート地はブランチだ。一方庶民はというと、ブルックリン橋を渡ってコニーアイランドに押し掛けた。当初は路面電車、フェリーなどを乗り継ぎ、2時間半かかった。コニーアイランドはニューヨークの勤勉、儉約といった価値観の社会と対照的に、浪費、陽気さなどのカーニバル精神を強調した。路面電車やフェリーに助けられ、楽しみを求めてこのリゾート地区に集まる人の数は、1900年までに10万人に達した。海、遊歩道、エスカレーターなどの卑俗な情景は、リアリスト画家のうってつけの題材であった。マーシュは『コニーアイランドの海辺』において、海辺の群衆をピーチ・チェアーに座って優しく目を注いでいる老詩人ホイットマンを描き、彼の民主主義精神への敬意を表している。1890年代から1920年代にかけて、暑いニューヨークの街路を逃れて、週末をコニーアイランドで過ごしにくる庶民たちの好物はやき蛤からホットドッグに代わった。ヴァンダービルト鉄道王のような大富豪も庶民とともにネイサン店名物のコニーアイランドという焼き蛤を味わっていた。

世界から若者を集めていた当時のフランスの海岸でも男女は別々に泳いでいたが、アメリカの前記の海辺では、男女が笑いながら一緒に砕け波の中で転んだり、起き上がったたりする光景が見られた。彼らはあまり泳いだりせず、安全ロープにつかまって身体を動かすだけであった。

(天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長)

【第 27 回年次大会シンポジウム・基調講演】
植民地時代カトリック宣教師のマヤ語文法と
現代のマヤ語研究をつなぐ

吉田 栄人

ユカタン・マヤ語（ユカタン半島で話されている先住民言語は現地語で maya と呼ばれている。その他のマヤ系 (mayan) 言語と区別するために言語学者は yucatec maya/maya yucateco と呼んでいる）の研究において現代のマヤ語は植民地時代まで話されていたマヤ語と比べて、語彙のみならず、文法規則も大きく変化している、というのが今日のマヤ語研究者の常識となっている。確かに植民地時代に宣教師たちが書き残した文法解説書と現代のマヤ語の文法解説書を比べてみれば、その違いは明らかである。ところが、両者がどのように違っているのかを明確に説明した研究はほとんどない。

実のところ、現代マヤ語でさえ、文法規則をまともに説明した文法書を私は見たことがない。少なくとも、規則を体系的に説明したものは見当たらない。入門的なレベルの文法書は多数存在する。だが、動詞の活用形は全部でいくつあり、それぞれがどんな機能を持っているのかさえ、明確に説明したものは一つもないのだ。

そこで私はユカタン・マヤ語の動詞変化の仕組みを特定する作業を始めた。その仕組みは、ネイティブ話者に聞いても、知っている人は一人もいない。マヤ語を教えているネイティブの先生でさえ知らない。結局、コーパスを使って動詞を抽出し、その用法を分析するのが簡便で手取り早い。ユカタン・マヤ語にはそれに耐えうるだけの対訳付きコーパ

スが蓄積されているのだから、ありがたい。

その作業についての説明は割愛せざるを得ないが、分析の過程で、表記の揺れに遭遇した。現代のユカタン・マヤ語のテキスト（コーパス）は、アメリカ人言語学者が持ち込んだ原則である、発話音声を忠実に再現しようとする音声学的な観点から作成されているため、表記に揺れが生じるのは当たり前と言えば、当たり前である。ちなみに、この音声重視の表記法はユカタン・マヤ語の標準語化の大きな妨げとなっている。たとえば、「食べ物・食べる」を意味する単語 janal（ハナル）は語尾の l が消失し、ハナーとも発音される。それゆえ、アメリカ人言語学者から表記法を教わった現地の人たちはこれを janaj と表記しようとする。辞書にはこの二つが記載される始末だ。とにかく、発音される音を厳密に表記しようとするがために、表記法の統一が進まない。こうした混乱をもたらした張本人であるアメリカ人言語学者たちは、これはマヤ人たちのアイデンティティの問題だから、それを尊重すべきだということだから始末が悪い。マヤの人たちは表記法をめぐる西洋の言語学者たちの代理戦争をさせられているようなものだ。

さて、それは脇に置くとして、表記法の問題は私のマヤ語研究に新しい視点をもたらしてくれた。実は植民地時代に書かれたマヤ語のテキストは現代語のテキスト以上に表記の揺れが激しいのである。これは一体何故なのか、誰も真剣に考えたことがない。私は植民地時代のテキストの中の個々の単語はどんな音声を表しているのかという観点から見直しを始めた。書かれた単語は字面通りの音声を表しているものだ、とマヤ語研究者

は思っている。たとえば、スペイン語の no に相当する否定辞は、現代マヤ語では ma', ma'a, ma'aj などと表記される。no が nooo や nooooh と表記されるようなものである。植民地時代のテキストでは ma, maa, maix, mait と表記されている。ma の後ろに現われる -ix や -it といった文字列は一体何なのか。実はこの -ix や -it には他の単語にも使われており、一定の規則性が認められる。これらは語末の氣息音と考えるのがもっとも妥当である。つまり、-ix や -it は語末の氣息音を表すための記号だった可能性が極めて高いのだ。マヤ語を最初に書き留めた人たちはスペイン語に存在しない音をこうしたいくつかの記号を使って書き表さざるを得なかったはずだ。ところが、その表記上の約束事はいつしか忘れ去られてしまい、研究者は安易にスペイン語と同じ音価で発音するようになり、現代に至っているのだ。

また、ユカタン・マヤ語は発話の際にしばしば強勢のない音節の母音が消失する。CVCVC の音声構造を持つ単語に接尾辞の i が付加された場合、CVCCi のように母音が消失することがある。たとえば、Ma' in wojeli'. マー・イン・ウォーヘリ（私は知らない）は、Ma' in wojli'. マー・イン・ウォーリと発音される。こうした現象は植民地時代の文法書にも記載されている。ところが、植民地時代の動詞の分析に当たって、この事実は全く無視されてきた。その結果が不可解な文法規則を生み出しているかもしれないことに誰も想像をめぐらさない。その結果が、植民地時代のマヤ語と現代マヤ語の文法は異なっていると言説を生み出しているのだという発想を持てば、どのような研究が可能になるかは、想

像が付くはずだ。少なくとも、植民地時代のマヤ語コーパスを分析するにあたっては現代語と同じ音声表記に変換し、しかもバリエーションを統一する必要がある。

以前、こうした観点から植民地時代の文法規則を再検討した結果を論文にして、学会誌に投稿したことがあった。しかし、査読者からは次のようなコメントを頂き、不採択となった。現代のマヤ語研究が抱える問題点を具体的かつ如実に示すものなのでご紹介しておきたい。

著者は、「宣教師達が書き残した文法解説書にある規則が現代マヤ語には存在しないのは言語が時間の流れの中で変化したからだ、と多くの言語学者は考え、資料批判という手続きを回避してきた」と批判し、植民地時代に制作されたマヤ語の語彙集は、宣教師達が自ら考えた文法規則に従って作り出した単語や翻訳文を含んだマヤ語コーパスだったと考えるべきだという論を展開している。

評者は「宣教師達が書き残した文法解説書にある規則が現代マヤ語には存在しないのは言語が時間の流れの中で変化したから」と考える言語学者の一人である。宣教師達の残した資料は貴重な資料であり、ネイティブの残した資料にその裏付けを探し、同等の言語現象があれば、正しい記述と考える。そして一見奇妙な現象とみられるものも、他のマヤ諸語にあれば、問題ないと考えるので、著者とは言語観が異なるようである。

（中略）

（宣教師達）は我々以上に長い間言語観察をしていたので、彼らがすくい上げた言語現象は、我々以上に正確であった可能性がある。

確かに根本原理は十分理解していなかったかもしれないが、ラテン語やスペイン語の文法からはとても理解できない、言い換えれば、彼らの記述の範囲を超えた文法現象を、文法用語は別にしても、正確に記述しているのであり、もっと敬意をもって彼らの著作に接すべきであろう。彼らの記述の導きのお蔭で、行為者焦点化や romance subintelecto の本質を我々は理解できるようになったのである。

このコメントに対して反論する機会は与えられなかったので、日本におけるマヤ語研究はそこでストップしたままである。私の講演を聞いて下さっている方にはもはや説明の必要はないと思うが、マヤ語研究の現在地を明らかにする意味でも、査読者のコメントが私のような立場からはどのように見えるか、またどのように評価すべきなのかを簡単に述べておきたい。

査読者は拙稿の結論がどのようなプロセスおよび証拠から導き出されたのかを全く見ようとしな。それは、植民地時代の言語資料には宣教師たちの誤解による文法的なあやまちが含まれているというアプローチを取ることが、査読者のこれまでの研究成果を否定することに繋がるからだろう。だからこそ、「こういう不思議な現象こそ、作為ととらえるのではなく、それぞれの機能の意味を考察するのに貴重なデータととらえるのが言語学者の仕事ではないだろうか」や「彼らは我々以上に長い間言語観察をしていたので、彼らがすくい上げた言語現象は、我々以上に正確であった可能性がある。確かに根本原理は十分理解していなかったかもしれないが、(中略)、彼らの記述の範囲を超えた文法現象を、文法

用語は別にしても、正確に記述しているのであり、もっと敬意をもって彼らの著作に接すべきであろう。」といった、拙稿の内容に関する評価とは恐ろしくかけ離れた、説教にも似た方法論で自己防衛を図ろうとする。だが、この査読者の方法論こそが拙稿における批判の対象である。そもそも、歴史的な資料の信憑性を疑ってかかることは、それを言語データとして扱っていないということにはならないし、言語学者の仕事として不適切だということにもならない。植民地時代の文法規則が「間違っている」のは宣教師たちが分析を間違ったからではなく、表記上の問題点に気付かずに間違ったデータを使ってしまったことに由来する。私が言っているのは、その間違ったデータを正しいデータに直した上で分析をやり直すべきだということである。これまでのマヤ語研究者はテキストの字面だけを見ていた。それを音声学的な表記に変換した上で分析しようというのが私の提案である。

大越翼も植民地時代の先住民文書に関して似たようなことを言っている。曰く、「先住民文書が『先スペイン期の歴史や文化、宗教を記したもの』であり、その後になされた写しはこれを忠実に再現するものであったとみなし、かつそこに読み取れる『意味』も同然(ママ)であると考えるのは、もはや幻想にしか過ぎない。まずは、これらの写しが作成された時点での彼らの関心のあり方を示すものだと理解することから始めよう。」(『グアテマラを知るための67章』桜井三枝子編著、明石書店、2018年、120頁) 植民地時代に作成された現存するマヤ語の辞書や文法書(およそ60年間隔で3回改定されている)

は、先達宣教師たちの書き残したデータが幾世代にもわたって書き写され、それを元に分析が繰り返されてきたものである。書き写した人はただ単に文字を書き写した（時に読み間違えることもあった）だけであり、それが元々どのような音を表していたのかさえ考えもしなかったかもしれない。彼らは自分たちの知っている読み方で文字列を発音し、解釈をしてきたのだ、ということ了我々は理解しなければならない。そうした観点に立てば、後世の宣教師たちによる間違ったマヤ語の読み方が、彼らの使うマヤ語を通じて、カトリック信者であるマヤ人のマヤ語に多大な影響を与えて行った可能性すら見えてくるのである。

（東北大学大学院国際文化研究科元准教授）

【2023 年度アメリカス学会夏期定例研究会・ 発表報告要旨】

日系新宗教の海外伝道と日本文化活動 —ニューヨーク天理文化協会とオセアニア出 張所を事例として—

尾上 貴行

日系新宗教の海外での布教活動は戦前から行われていたが、非日系人への急激な広まりを見せたのは 1960 年代以降である。その伸展の主な要因としては、グローバリゼーション、日本経済の発展、世界的な情報技術の急速な進展、諸国での宗教への寛容性や現世利益への関心の高まりなどがあげられている。その一方で、ヨーロッパや北米においてさほど非日系人への広まりをみせていない日系新宗教があり、これらの教団の民族的・日本的要素がヨーロッパや北米社会に適応していく上で障害となっているという指摘もみられ

る。宗教の海外伝道における異文化適応研究のなかで「現地化」は大きなテーマの一つであり、現地化にあたり日本民族的・文化的要素はマイナスに作用すると考えられ、排除されたり、薄められることが多い。しかし、海外で布教活動を行っている日系新宗教教団のなかには、現在でも日本文化活動を積極的に行っている教団もある。本発表では、このような先行研究の知見をもとに、日系新宗教が戦後に海外での布教活動を展開するうえで、日本文化活動がどのような意味をもつのかについて考察した。日系新宗教の一つ天理教は、戦前から積極的に世界各地で海外伝道を展開し、さまざまな文化活動も展開している。そこで今回は、ニューヨークにあるニューヨーク天理文化協会とブリスベンにある天理教オセアニア出張所を事例として取り上げた。

発表では、まず天理教の日本語教育について概観した。日本国内では、戦後に北米と南米諸国を巡教した中山正善二代真柱は天理教教会長や信者の子弟への教育の必要性を痛感し、教会本部での海外子弟への教育体制を整えていった。その結果として 1958 年天理大学に専科日本語科が創設される。別科日本語課程への改組をへて、1994 年には大学を離れ、天理教語学院の日本語科となり、現在に至っている。海外においては、1971 年にパリに設立された天理日仏文化協会にパリ天理日本語学校が開校され、以降シンガポール、香港、ニューヨークに日本語教育機関が設置された。また、各国、各地の天理教布教拠点にも、さまざまな規模の日本語教室が開設された。

つぎに、ニューヨーク天理文化協会（以下 TCI）とオセアニア出張所（以下 TOC）の

概要を説明し、それぞれの日本語教育の特徴を明らかにした。TCIは天理教ニューヨークセンターの下部組織として1991年に設立され、コンサート、展示会などをさまざまな文化活動を展開している。日本語学校はTCI設立当初から開校し、当初は大人クラスのみであったが、2002年には子供クラスも開始し、ニューヨークの社会状況を反映して、さまざまな文化的背景をもった人々が学んでいる。在ニューヨーク日本国総領事館のホームページでニューヨークでの日本語学習機関の一つにあげられるなど、その存在は地域社会で認知され、地域社会での日本語教育にさまざまな貢献をしている。また日本語教育を通じて構築される人的ネットワークが、ニューヨークセンターの宗教活動にも有機的に結びつき、天理教の布教伝道においてもプラスに働いているといえる。

1997年ブリスベンに開設されたTOCでは、祭儀、布教、教義セミナーなどの宗教活動、子ども会、若者の集い、教理勉強会などの教育活動、ボランティア、災害救援募金などの社会活動とならんで、日本文化活動として、祭り、音楽や料理などの日本文化紹介、地域社会での文化交流などを行っている。1999年2月からは、地域住民に気軽に日本語を学べる機会を提供し、TOCの存在を知ってもらい天理教の雰囲気に触れてもらうことを目的に、日本語教室を開始した。当初は週1回1クラスのみであったが、希望者の増加に伴い、クラス数が増加し、これまでにレベル別、目的別にさまざまなクラスが開講されてきた。現在は、大人の個人レッスンのみ行われている。TOC日本語教室の地域社会での認知度は高いとはいえず、規模の点からも地域社会

への大きな貢献はみられない。また天理教の伝道推進においても際だった成果を治めると言えない。しかし、日本語教育の場を提供していることはオーストラリアの多文化・多言語・多宗教社会を形成する一つの要素になっていることが、生徒のコメントからうかがえる。日本語教室は日本人布教師が現有する布教活動のための有効な一手段であり、現地社会との接点、地域住民とのかかわり、天理教紹介の機会創出という点で天理教の地域社会への「定着・定住」に寄与しているといつてよいだろう。

最後にこれら2つの事例から明らかになったことをまとめたのち、その課題について触れ、本研究の限界と今後の方向性について述べて発表を締めくくった。ニューヨークとブリスベンでの天理教の事例から、日本語教育は布教活動促進や現地社会での受容に貢献している、つまり、日本文化活動が日系新宗教の海外伝道活動にプラスに作用していることが明らかになった。ただし同時に、日本語学校や教室における運営、内容、教師確保などの課題、日本語教育を天理教伝道へいかに結びつけるかという課題が浮き彫りになった。また日本文化に興味のある人しか集まらない、日本との強い繋がりにより天理教は「日本文化」であるというイメージを生み出す可能性があるという点も課題として見られた。このように、先行研究が指摘する日本文化的要素が伝道伸展の障害になるという指摘は必ずしも否定できないだろう。日系新宗教による海外での布教活動推進における日本文化活動の意義についての議論を深めるため、今度も引き続き調査と研究を進めていきたい。

(天理大学おやさと研究所講師)

観光ボランティアガイド実習報告

野口 茂

筆者は本年3月から4月にかけて、インバウンドのV字回復が進むと共に桜シーズン到来でにぎわう京都にて、スペイン語による観光ボランティアガイドの実習を実施した。

コロナ禍が終息に向かうなか2022年10月に水際対策が緩和。以降、訪日外国人観光客は右肩上がりに増加し、2023年8月にその数は215万6,900人（推計値）に達している（日本政府観光局⁽¹⁾）。また、本学では2024年度の改組によって新外国語学科が誕生し、7言語コースそれぞれに「〇〇語で学ぶ日本文化」や「観光〇〇語」という科目が新設されることになっている。そのため、観光の現場において知見を広めるとともに、実践的で学生のニーズに沿った外国語教育のあり方を探るため、今回の実習を企画することとした。

スペイン語圏から来日する観光客は、全体の割合からすると僅かであるため、観光地でガイドの希望者を探すことは難しい。そのため、京都を中心にスペイン語のボランティアガイドをしている本学卒業生のK氏から協力を得たおかげで、ツアーに毎回数名の学生をボランティアとして同行させることができた。

ツアーには日によってスペイン、メキシコ、コロンビア、アルゼンチン、そしてウルグアイからの観光客が数名ずつ参加。学生には、彼らとともに観光ルートをめぐり、主要な観光名所についてスペイン語でガイド案内するよう課題を与えた。また終了後は、参加学生へのアンケートやヒアリングにより、実習内容に関してのフィードバックを得た。

今回の実習で訪れた観光名所のなかでも、

外国人観光客にとって最も人気のスポットは伏見稲荷大社であろう。朱塗りの鳥居が隙間なく立ち並ぶ千本鳥居に、誰もが圧倒されていた。これほどの数の鳥居が奉納される理由、その奉納料、「稲荷」の由来や大社の歴史、そして「おもかる石」やキツネの石像、絵馬やおみくじ等々、神秘的で好奇心がくすぐられることばかりで、それぞれに観光客のニーズに応じた簡潔なガイドが求められた。また大社内をめぐりながら、神道や仏教など日本の宗教文化についても話題が及んだ。

実習に参加した学生の多くは留学経験者であったため日常会話には支障がなかったものの、実施後のアンケートには「いざ観光客の方を前にすると、緊張で思っていた以上に言葉に詰まってしまった」「自分の語学力がまだ足りないことが実感できた」といったコメントがあった。一方で、「この苦い経験をこのままにしておかぬよう、これからもスペイン語学習に力を入れたい」「勉強のモチベーションが上がった良いきっかけになった」「日本に関する知識も深めていく必要を強く感じた」といった前向きな感想も得られた。

複数の観光名所をめぐる際の移動時間や食事をともにする一時は、旅行者との会話を楽しむ貴重な機会だった。日常生活から、日本人の思考・行動様式、歴史、宗教観にいたるまで多種多様な質問を学生たちは浴びることになったからだ。瞬時に答えが思いつかず口ごもる時もあれば、知っている知識や単語を総動員してなんとか対応した時もあった。こうした経験学習の積み重ねは語学教育には非常に有効であり、さらなる学習意欲の向上につながるはずだ。ガイド実習ならではの醍醐味でもあろう。

今後も外国人観光客のさらなる増加が見込まれ、観光ガイドや通訳が必要とされる機会がより増えると予想されている。引き続きガイド実習を継続して、社会のニーズを把握しながらそれをどのように授業に反映させることができるか検討していきたい。

[註]

(1) 日本政府観光局「訪日外客統計」

<https://www.jnto.go.jp/statistics/data/visitors-statistics/>

(天理大学国際学部教授)

お知らせ

◇天理大学アメリカス学会は、きたる12月2日(土)13時から天理大学研究棟3階第1会議室において、「第28回年次大会」を開催します。記念講演はZoomでの参加も可能です。オンライン参加を希望される場合は、本学会までメールでお知らせください。大会プログラムは以下のとおりです。

【大会プログラム】

<総会>

13:00～13:10

開会挨拶・活動報告・会計報告

<年次大会>

13:10～14:00 記念講演

福嶋 教隆氏(神戸市外国語大学名誉教授)

「教材用の diálogo の作成について」

14:00～14:10 休憩

14:10～14:30 報告1

橋本 和美(天理大学国際学部准教授)

「コーチングによる「BDHの生き方を考えるワーク」が外国語学修に与える影響—オンラインと対面授業の比較—」(仮)

14:30～14:50 報告2

吉野 達也(中京大学グローバル教育センター外国語嘱託講師)

「学生の主体性を尊重したスペイン語教育」(仮)

14:50～15:10 報告3

野中 モニカ(天理大学国際学部教授)

「CAN-DOリストを使用したポルトガル語学習評価」

15:10～15:30 報告4

スティーブ ユゴビッチ(天理大学国際学部特任准教授)

「Student's Lifestyle Self-Reflections and Impact on Learning in English C.B.I. Course」

15:30～15:50 ディスカッション

15:50 閉会の辞

編集後記

◇巻頭言を執筆して下さった木村先生は、宗教学を専門とするアメリカ地域研究者です。玉稿では、気候崩壊において、あらゆる生命体を育む地球の生のありようを、私たちは当事者として考え行動せねばならないことを、AIを含めた技術革新への視点を絡めて問題提起されました。果たしてそれは如何に。まさに、人間観・宗教観を問う、難しい課題といえます。吉田先生は、現在専門調査員としてグアテマラにおられるなか、昨年度シンポの原稿をお寄せくださいました。お二人に心より感謝いたします。

天理大学アメリカス学会ニューズレター
(No. 89: 2023年11月9日発行)
発行者: 山田政信
〒632-8510 天理市杣之内町1050
天理大学アメリカス学会
e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp
<http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/>